

## 学界動向

### マルクス主義における〈思想と科学〉・〈論理と歴史〉

——経済学史学会関西西部会第四〇回研究会の報告と問題点——

細見英

#### 一

去る一月二九日午後、本学衣笠学舎で、経済学史学会関西西部会の第四〇回定例研究会が催された。

報告は二本。田中真晴氏（京大）「プレハーノフの著作刊行史と研究史について」、佐藤金三郎氏（大阪市大）「宇野弘藏教授の『原理論』、とくに『流通論』の方法について」。

経済学史学会は、会員数約四〇〇名。全国大会は年一回、秋に開催。あわせて関東、関西、西南の各部会組織をもち、それぞれ定期的に研究会をおこなっている。本学関係の会員は、相沢、建林、高橋良三、浜崎、岡崎、細見の六名と、他に「名誉会員」（実は会費滞納のため除籍中。ただし当日の

研究会の討論では、もっとも熱心な「会員」の一人であった）として梯明秀氏。

一月二九日の研究会は、出席者約四〇名の小規模な学舎であったが、田中・佐藤両氏の報告は、いずれも長年の堅実な研究にもとづく密度の高いものであって、問題提起に充ちた実に興味深いものであった。以下に両報告の要旨を紹介し、あわせて、両者の背景に共通してひそめられている一つの根本的問題点、すなわち、マルクス主義・マルクス経済学とは本来なにか、の問題について、私なりに若干の考察を試みたい。

#### 二

田中真晴氏はここ数年來、「ロシア・マルクス主義の父」ブレハーノフ（一八五六—一九一八）に焦点をおいて、一九世紀後半のロシア経済思想史の研究を精力的にすすめてこられた。<sup>1)</sup>氏の報告は、これまでの氏の研究を背景に、一、ソビエトにおけるブレハーノフの著作刊行史を検討し、二、ブレハーノフ評価の変遷と問題点を摘出して、三、現代におけるブレハーノフ研究の視角と課題を確定しようとするものである。

#### 一、著作刊行史とその特徴

氏によれば、ブレハーノフの死後これまでに、つぎの三種の著作集・選集が刊行されてきた。

- ①『ブレハーノフ著作集』、リャザーノフ編、二四巻、一九二二—二七年。

- ②『ブレハーノフ遺稿集』、八巻、一九三四—四〇年。

- ③『ブレハーノフ哲学選集』、五巻、一九五六—五八年。

これらの著作集の内容を検討するとき、収録範囲がしだいに狭くなってきていることが特徴的である。すなわち、①の『著作集』は当初全二六巻からなる実質上の全集として計画されたながら、第一次大戦勃発後のブレハーノフの時局評論、

ならびにメンシェヴィキ系の人々をとりあげた伝記類が割愛されたまま二四巻でうちぎられ、②の『遺稿集』は、ブレハーノフが戦略論・組織論をめぐってレーニンと対立しメンシェヴィキの側に移った一九〇三年以後の綱領・戦術関係を除外しており、③『哲学選集』は、思想史、文学・芸術論をふくむひろい意味での哲学関係著作をあつめたものであるが、ナロードニキ時代のもは収録されず、「労働解放団」時代のもは哲学以外の政治論などまでおさめ、晩年のかれの方法論を代表するロシア社会思想史の「序説」は除かれている。

ようするに二十年代初頭以降の著作刊行史において、収録範囲が、時期的には一八八三年—一九〇三年のブレハーノフのいわゆる「マルクス主義期」のものに、内容的には哲学関係著作に、しだいに限定されてきているわけである。

#### 二、ブレハーノフ研究史

著作刊行史上の右のような推移は、ソビエトにおけるブレハーノフ評価の変遷を反映し、これはまたこれで、ソビエト・マルクス主義の転変過程を反映している。すなわち、「レーニン主義・スターリン主義」唯一の正統マルクス主義一視の確立。これを基準とする先行ならびに同時代諸思想の評価

裁断。

ソビエトにおけるブレハーノフ評価の変化は、ブレハーノフの思想発展の時期区分にもっとも典型的に示めされている。二十年代初頭『著作集』発刊当時、リャザーノフはブレハーノフの著作活動を区分して、①ナロードニキからマルクス主義への移行期（一八七八―一八二二年）、②マルクス主義の時期（一八八三―一九一四年）、③祖国防衛派の時期（一九一四―一八年）としていた。ところが現代ソビエト学界では、ブレハーノフのマルクス主義期を一九〇三年までとし、これ以後をメンシェヴィキの時期とするのが通説となっている。つまり、レーニンとの党派的对立・メンシェヴィキへの移行はマルクス主義からの逸脱・墮落、という把握。

このようなブレハーノフ評価の変化の画期を田中氏は、一九三〇年前後のデボリーン批判、ミーチンによる「哲学のレーニンの段階」提唱の時期に推定される。そしてスターリン批判以後あいっいで出されたブレハーノフ研究（プロヴヰェル『ブレハーノフの経済観』一九六〇年、ポリヤンスキー『ブレハーノフとロシア経済思想』一九六五年など）においても、文献実証的には緻密化しながらも、レーニンを絶対基

準とするブレハーノフ評価の点では、なんの変化も認められないことを指摘された。

これに反して西側のブレハーノフ研究では、一般に、ブレハーノフがレーニンと対立している点ほどほめられている。ブレハーノフとレーニンとの連続面と断絶面にたちいった考察をくわえブレハーノフ研究の水準を飛躍的に高めた、アメリカのパロンの労作『ブレハーノフ』（一九六三年）にしても、マルクス主義者としてのブレハーノフよりも、「時代おくれ」のマルクス主義をまといながら、にもかかわらずロシア社会の真実を見つめていたブレハーノフの西欧主義的・近代主義的側面が、——ソビエト全体主義の先駆的批判という意義をもこめて——評価されている。

### 三、ブレハーノフ研究の視角と課題

ソビエトのブレハーノフ論にせよ西側のそれにせよ、その研究視角は、田中氏にとって満足できるものではない。レーニンを、あるいはアンティ・レーニンを基準にしてブレハーノフを切るのではなく、まずもってブレハーノフの思想と論理それ自体の特質が内在的に把握されるべきではないか。これによって、終始「正統マルクス主義者」を自認したブレハー

ノフの思想と行動が、それなりに首尾一貫したものととしてとらえうるであらう。そしてその上で、ブレハーノフとレーニンの二つの「正統」のもつ思想的・理論的ならびに実践的・歴史的な意義と限度——当代にたいして、また現代にたいしてもつ意義と限度——が見さだめられるべきではなからうか。田中氏の視角は、ほぼこういったものである。

このような視角からするブレハーノフ研究の主たる課題・問題点として、田中氏は、つぎの三点を提示される。①ロシア・マルクス主義の先駆的労作としての意義の究明、とくにロシア資本主義論を軸として。②ブレハーノフの「正統マルクス主義」の検討。③東洋的デスポティズム論の視点からするブレハーノフのロシア社会論の意義を、史的唯物論との関連で検討すること。

①の課題に田中氏は、これまでの労作でうちこんでこられた。その成果をふまえて②、③の課題が提起されているわけであるが、これらの点について氏の表明された展望には、きわめて興味ぶかいものがある。

田中氏はブレハーノフの思想の特質を、究極のところ、「マルクス主義内部の客観主義」と特徴づけられる。「客観

主義」というのは、つぎの意味あいにおいてである。「唯物論的見地に立ちながら、経済過程の政治過程に対する規定性を過大に評価する傾向をもつ点で、したがって革命主体の自由な歴史創造の可能性の幅を狭く考える傾向をもつ点で、客観主義的<sup>(2)</sup>」。この規定がレーニンとの対比を念頭においてのものであることは、いうまでもない。おなじく二段階革命の構想から出発しながら、社会主義、革命を身近かの課題として主体的にうけとめ、つねに経済的基礎過程を革命運動の動向・当面する課題との動的関連のなかで理論化して、ロシア革命の成功を指導したレーニン。これにたいしてブレハーノフは、世界資本主義の新展開、ロシアにおける革命運動の進展を眼前にしながらも、現実の状況にたいして非妥協的に、マルクス・エンゲルスの諸命題を忠実に墨守し、後進資本主義国ロシアにおける社会主義革命の時期尚早を説いてやまなかった。（ここにブレハーノフの「正統主義」の、理論と実践における「客観主義」との相互規定的結合をみてとれよう）。したがって革命理論としての、マルクス主義の正統が、レーニン、ブレハーノフのいずれにあるかは自明である。

ではブレハーノフの「客観主義」は、まったく否定的な意

義しかもたないものか。客観主義的なるがゆえにかえって、革命の緊迫性の視点からは見落とされた、あるいはカッコに入れられた側面が、照射されることはなかったか。田中氏はすずんでこの点を追究される。そして、ロシア社会の後進性を半アジア的な伝統的社会構造のうちに追求しようとするブレハーノフの、東洋的専制主義の視角からするロシア社会論の構想のなかに、かれの「客観主義」の積極的な一面を探りだそうと企図されるのである。ブレハーノフのこの構想は、ソビエトでは、アジア的生産様式論争の過程をつうじて「地理的唯物論」として断罪されてきた。しかし、地理的環境が社会的諸関係・社会構造におよぼす一定の規定的影響は、史的唯物論の枠内でも承認されなければならないのではないか。ブレハーノフは唯物論に忠実にロシア社会の後進性を分析し、客観的条件を無視して歴史の段階をとびこそうとするボルシェヴィキの「行きすぎ」を警告しつつけた。ロシア革命は、ある意味では、この後進性をバネとして成った。しかしその飛躍の代価を社会主義建設の過程でせおわねばならなかったのであり、この点でブレハーノフの「客観主義的」観点は、こんにちなお後進国における社会主義革命、のみならず

一般に社会主義の理論と実践にたいして、有意味な示唆を与えている点がありはしないだろうか。

以上が、田中氏の報告と問題提起の要旨である。

討論では、「マルクス主義の内部での客観主義」という、ブレハーノフにたいする田中氏の規定について、①ミイチン以後のソビエト哲学界に一般にみられる客観主義的傾向とブレハーノフの客観主義との区別と関連、②ブレハーノフの客観主義のもつ積極的意義、の二点をめぐって熱心な意見交換がおこなわれた。

(1) 「一九世紀末ロシア資本主義論史の研究序説」(八卷一号、一九六二年一月)以降、さいきんの「ブレハーノフの著作集について」(九七卷三号、一九六六年三月)にいたる、京大『経済論叢』に掲載された一〇篇の論稿。ならびに、『経済学史講座』第三卷(有斐閣、一九六五年)所収の「ロシア資本主義論の展開」。これら一連の労作は、近く『ロシア経済思想史の研究』にまとめられ、ミネルヴァ書房から刊行される。

(2) 田中真晴「ブレハーノフのロシア資本主義論」『経済論叢』八九卷五号(一〇ページ)。

## 三

佐藤金三郎氏の報告は、するどい問題意識と綿密な文献考証によって『資本論』成立史の研究をおこないつつ、その過程でたえず宇野理論との対決を試みてこられた同氏が、「日ごろ考えていることの一端」をのべて討議の素材に提供されたものである。

氏の念頭には、近年の宇野学派の内部分裂がある。かつて宇野理論の特質は、「経済学研究における三段階論」（原理論・段階論・現状分析）の提唱と、この見地からする『資本論』の「原理論としての純化」の試みにもとめることができた。しかし、周知のように、数年前より宇野学派のなかで、鈴木鴻一郎氏・岩田弘氏らによって、原理論の対象 $\parallel$ 純粹資本主義という宇野理論の基本前提の一つにたいして異論がだされ、原理論を「世界資本主義の生成、確立、展開の内的叙述または内的模写」（鈴木氏）と性格づける見解がうちだされてきた。この見地にしたがえば、宇野氏の強調する原理論と段階論との方法的峻別は、事実上否定されることとならざるをえない。

このような宇野理論の基本的見地における宇野派内部の分

裂は、けっして偶然のことではなく、宇野弘藏氏の提唱になる「原始」宇野理論の論理のなかに、宇野氏の方法と体系とのあいだに、内的矛盾として分裂の契機が胚胎しているのではないか、そして宇野氏の体系が、氏自身認められるように、三段階論の全体にわたってはこれまでのところ未整備であり、原理論においてのみ一応の完成をみていることからしても、その内的矛盾は宇野氏「原理論」のなかにこそ求められるべきであろう、というのが、佐藤氏の問題設定である。

宇野氏「原理論」のなかでとりわけオリジナルなのは、三篇構成の第一篇を「流通論」とし、ここで商品・貨幣・資本をもつばら「流通形態」として考察するところにある。宇野氏によれば、商品論においては、マルクスがおこなっているように生産や労働を論じてはならない。「流通形態」としての商品・貨幣・資本の展開のちにはじめて、流通形態による生産過程の包摂把握として、第二篇生産論が論ぜられるのである。

このきわめて独自の方法、商品・貨幣・資本は生産論にすぎだつて、流通形態として論じなければならぬという主張はいかなる理由、根拠にもとづくものか。この点の分析的・批

判的検討に佐藤氏の考察はしぼられてゆく。

(1) ネガティブな理由——マルクス批判

マルクスの商品論の展開のなかに、宇野氏は二人のマルクスを見いだす。すなわち、価値実体論—古典派価値論の残滓につきまとわれているマルクス、価値形態論—本来のマルクス。そして、「古典派マルクス」を切除して、商品論を本来のマルクスのもの—「価値形態論」に「純化」すべきだ、とされる。

たしかに古典派をこえるマルクスの業績が、商品論の領域において、価値形態の把握・展開にあることは、認められねばならない。しかしそれは、古典派の価値実体論を継承しつつ、ブルジョア社会の歴史的把握を基礎に、実体分析を徹底すること（なかんづく、労働の二重性、価値を形成する労働の質の解明）によってはじめて可能となったのではないのか。宇野氏は古典派経済学の意義、ならびにそれとマルクスとの関連を無視しているといわざるをえない。

(2) ポジティブな理由——その①、論理的説明

宇野氏は、原理論の対象は「純粹資本主義」であり、純粹資本主義からの抽象としては商品・貨幣・資本は、まずもつ

て流通形態としてしか把握されない、という。だがこのばあい、「抽象」の仕方に問題があるろう。資本の生産物としての商品から資本主義的生産関係を捨象しても、商品の生産関係一般は残るとしなければならない。しかるにこのようなマルクスの抽象を宇野氏は、古典派の方法に墮するもの、「商品経済史観」におちいるものとして排斥し、「資本主義的生産関係の捨象」のもとに生産関係一般を捨象して、純粹な流通形態をとりだす。このような宇野氏の抽象方法は、氏特有の資本主義把握——資本主義を流通形態が実体を包摂した社会にとらえ、したがって流通形態こそ資本主義的關係の中心基軸をなすとする理解、を基礎とするものであって、「流通形態」論の論理的基礎づけとしては、循環論でしかない。

——その②、歴史的説明

「流通形態」論の歴史的理由づけとして宇野氏は、商品・貨幣・資本は資本主義以前の諸社会にも出現し、したがって歴史的にみて特定の生産関係と内的必然的な関係をもたない「流通形態」であった、といわれる。このことは、あるいみではあつたっている。だがそのさい宇野氏は、元来商品が共同体と共同体のあいだに、余剰物の交換として発生したことが

ら、商品・貨幣等が本来生産過程にたいして外的・遊離的な存在であることを強調される。しかし、商品として交換されるかぎり、そこに商品の生産関係は存在したとみるべきではないか。歴史的には一〇〇%の単純商品生産者は実在しない。宇野氏は一〇〇%の商品生産関係でない商品生産関係としては認められないのであるが、それならば資本主義以前の社会に出現した商品は商品でなかったというべきであろう。

以上にみた宇野氏による「流通形態」論の論理的ならびに歴史的な根拠づけは、しかしながら、相互に矛盾するものである。論理的には宇野氏は、原理論の対象を「純粹資本主義」として設定し、冒頭の商品を資本主義的商品と規定される。しかるにこの商品がたんなる「流通形態」として扱われなければならぬ理由を、歴史的にみて、商品が流通形態であったことに求められるのであって、これは明らかに矛盾というほかない。宇野氏「原理論」における八「純粹資本主義」の前提と「流通形態」論との二律背反<sup>2)</sup>。

ところで佐藤氏によれば、宇野氏自身においては歴史的根拠づけの方が本来的・根源的なものであった。歴史的な流通

形態による生産把握の視点、すなわち「流通浸透視角」（大島雄一氏）とこれにもとづく「流通形態論的立場」（岡崎栄松氏）こそ、宇野理論の本来的見地をなす。そしてこの見地を徹底することによって右にみた宇野理論の内在的矛盾、二律背反を打開しようとする試みが、鈴木・岩田氏らの「新版宇野理論」にかならない。だが新版にせよ旧版にせよ両者に共通する基本見地たる「流通形態論的立場」からは、生産過程の展開のうちに歴史発展の基礎を見いだすマルクス経済学の基本観点が脱落し、商品にせよ資本主義社会そのものにしても、歴史発展の過程における必然的な一産物、一段階であることの明確な認識が生じえない。要するに歴史の運動が説明できない。したがってまた、資本主義の変革・消滅の必然性も経済学の論理のうちで説明されることなく、ただ「商品経済の廃棄」が当為的要請として主張されるにとどまるのである。

以上の佐藤氏の報告については、①宇野理論において社会主義経済学はどのように扱われるのか、②宇野理論の積極的意義はどの点にあるか、の二点について、質疑がかわされた。

(一) 直接宇野理論に批判的に関説した氏の論稿として、



次のものがある。

「独占資本分析の方法をめぐって」(『経済評論』一九六〇年一月臨時増刊号)

〇年一月臨時増刊号)

「書評・宇野弘藏著『マルクス経済学原理論の研究』」

(『思想』一九六〇年十二月号)

「経済学体系における論理的展開と歴史的發展」(『経済評論』一九六二年二月号)

「貨幣の資本への転化」の論理と歴史——宇野弘藏教授の所説によせて——」(一橋大『経済研究』一四卷三号、一九六三年七月)

「学界展望・マルクス経済学の形成・『資本論』成立史をめぐって」(『経済学史学会年報』第二号、一九六四年二月)

(2) 『経済研究』一四卷三号、二二二ページ。

研究会の席では時間的制約もあって十分つっこんだ討論はおこなわれなかったが、田中・佐藤両氏の報告は、プレハーノフ、宇野理論と対象を異にしながらも、共通して一つの根本的な問題提起を背後にひそめている。

田中氏は、レーニンを正統マルクス主義の唯一の基準とし、これによってプレハーノフ(のみならず諸思想一般)を裁断

するソビエト・マルクス主義の方法を批判して、プレハーノフなりの「正統マルクス主義」の意義の再検討を提唱された。佐藤氏は、宇野氏「原理論」の内部矛盾とその基礎を解明して、マルクス経済学がいかにあってはならないかを明らかにされた。

では、マルクス主義・マルクス経済学とは本来なにか、またいかにあるべきか。マルクス主義・マルクス経済学における「正統」の基準は何か。——この問題について、両氏の報告ならびに最近の学界・思想界における宇野理論批判を手がかりとして、若干の考察を試みたい。

さいきんのわが国マルクス経済学界の、経済学の方法と体系に関連する諸研究・諸論議は、直接間接に宇野理論をめぐっておこなわれているといっても過言ではない。そのさい主たる問題は二つに大別できる。すなわち、(1)経済学体系における論理と歴史の関連、(2)マルクス主義における思想と科学、理論と実践の関連。この二つの問題は相互に密接な内的

連係をもつものであるが、岡崎栄松氏、佐藤金三郎氏の宇野批判、宇野学派の内部分裂、「貨幣の資本への転化」にかんす

学 界 動 向

一五七 (一五七)

る一連の論争等は、主として(1)の問題をめぐってのものである。他面(2)の問題にかんしては、黒田寛一、梅本克己氏らによって、すでに問題解明がおこなわれてきた。『思想』誌上（一九六六年一月号・二月号）における宇野・梅本氏の対談「社会科学と弁証法」は、これらの問題点、とくに(2)の点について、問題の所在を浮きぼりにしていきわめて興味ぶかい。

(1) 岡崎栄松氏の宇野批判——

「価値論の方法にかんする一考察」（『経済評論』一九五九年四月号）

「商品論の展開方法について」（『経済評論』一九六一年八月号）。

宇野学派の内部分裂を典型的に示す文献として、

鈴木鴻一郎「帝国主義論と原理論」（脇村教授還暦記念

論文集Ⅰ『世界経済分析』岩波書店一九六二年所収）

岩田弘「世界資本主義」（未來社一九六四年）

東大『経済学論集』二九卷三号（一九六三年一〇月）所

収の武田隆夫「原理論と帝国主義論」、およびシムボ

ジウム「帝国主義論と原理論をめぐって」

大内秀明「価値論の形成」（東大出版会一九六四年）、と

くに序論第二章第二節。

「貨幣の資本への転化」論争については、さしあたり、前掲佐藤金三郎氏の『経済評論』一九六二年一二月号、および『経済学史学会年報』第二号に所収の論文、および

大島雄一「価値理論と資本理論——貨幣の資本への転化」

論争によせて——(一)(二)(名大『経済科学』一一卷一

号、一九六四年一月・三月)、参照。

以上のほか、論理と歴史の問題をめぐる宇野批判として注目すべきものに、

堀江英一「産業資本主義の構造理論」（有斐閣一九六〇年）

見田石介「資本論の方法」（弘文堂一九六三年）

吉村達次「資本主義の運動法則における論理的なものと

歴史なもの」(一)——(四)(京大『経済論叢』八四卷五号

——一八七卷四号、一九五九年一月——一九六一年四月)

大島雄一「経済学体系と資本主義——いわゆる宇野理論

への一批判——」(一)(二)(名大『経済科学』八卷四号・

九卷一号、一九六一年六月・八月)。

(2) 黒田寛一「宇野経済学方法論批判」（現代思潮社一九六二年）

梅本克己「マルクス主義における思想と科学」（三一書

房一九六四年）第Ⅰ論文——以下「思想と科学」と略

称する。

梅本・佐藤昇・丸山真男『現代日本の革新思想』（河出書房一九六六年）第二部の「イデオロギーと科学」——以下『革新思想』と略称する。

なお、直接宇野理論の批判にあてられたものではないが、次の諸論稿はこの問題を考えるにさいして逸することのできないものである。

梯 明秀『ヘーゲル哲学と資本論』（未來社一九五九年）

『経済哲学原理』（日本評論社一九六二年）

杉原四郎『マルクス経済学の形成』（未來社一九六四年）

「マルクスの経済本質論に関する一考察」（関大『経済論集』一三卷一・二号、一九六三年六月）

「マルクスの労働観に関する一考察」（一橋大『経済研究』一六卷一号、一九六五年一月）

大塚久雄『社会科学の方法—ヴェーバーとマルクス—』

（岩波『図書』、一九六四年一〇月—一九六五年四月）

## 2

ところで、佐藤氏がその報告で焦点をあてられた(1)の問題

——△論理と歴史▽——についても、この問題を全面的に解明するためには、どうしても(2)の問題——△思想と科学▽——が深められなければならないように私には思われる。岡崎氏が宇野氏の価値論・商品論の方法を検討して、そこに「理

論的構成の首尾一貫性」の欠如——端緒の商品を一方では「資本主義的生産関係の中心基軸とでもいうべきものを純粹に表示する」資本主義的商品と正しくとらえながら、他方それを歴史上の單純商品にも共通するたんなる「流通形態」に解消して、「流通論」にはじまる「原理論」体系を構成していること——を内在的に摘出・批判されたこと、さらに佐藤氏が、この点をうけついで△「純粹資本主義」の前提と「流通形態」論との二律背反▽と一般的に定式化された上で、体系としての「三段階論」ではなくその基礎をなす方法的見地——「流通浸透視角」「形態論的立場」に宇野理論の根本特質があることを明らかにされ、そのかぎり「三段階論」をめぐる宇野学派の「内部分裂」も、同一見地の「内部」での分裂、むしろ根本特質の徹底・純化にはかならないことを明確にされたことは、きわめて重要な成果であった。そこで問題は、一歩すすめて、△首尾一貫性の欠如▽△二律背反▽の発生根拠、つまり「流通形態論的立場」それ自体の成立根拠とその意義の追究にむかわねばなるまい。もともと宇野氏の体系と方法の出発点は、周知のように、独占資本と帝国主義の現

段階において、たんなるマルクス解釈にとどまらないでマルクス経済学をいかに理論的に発展・展開するか、その方法の究明にあったのであり（そしてこの問題意識こそ、のちにも述べるように、宇野理論における唯一の積極的なものと私は考える）、したがって宇野理論の批判的検討は、宇野氏の方法・理論がマルクスのそれと異なることの一般的確認にとどまっていなければならないこととより、宇野理論における内部矛盾、二律背反の抽出から、さらにすすんで、その内部矛盾がなぜ生ずるのか、その基礎をなす「流通形態論の見地」はいかなる思想的・認識論的立場に成立し、そしてどのような意義をもつのか、といったことが、究明されなければならぬであろう。このことは、マルクス主義の全思想体系にたいする宇野氏の態度・理解を検討することにはかならない。

## 3

かくて問題は、(2)マルクス主義体系における思想と科学、理論と実践の関連の問題に移行する。そしてこの問題視角を正面にすえた梅本克己氏の宇野批判は、まことに注目すべきものである。なるほどこの問題視角から宇野理論における思想と科学、理論と実践の分離をつき批判は、これまででもくり

かえしおこなわれてきた。だが梅本氏のばあい、マルクス主義における「三源泉・三構成部分」（レーニン）の統一の論理構造、氏のことばでいえば「政治と哲学と科学との三位一体」の論理構造にたいする、ならびにマルクス主義の思想と哲学にたいする、氏の深い洞察に基礎をおくものであるために、宇野理論との根底的な対決となっている。とくに梅本氏の指摘される、宇野理論における「認識主体の弁証法」の欠如——というよりも、氏のいわれる内容をヨリ適確に表現すれば、主体・客体の弁証法の欠如——こそ、宇野理論のはらむ問題性の根本をつくものであり、あらゆる宇野経済学批判が有効たりうるための基礎を提供するものと、私は考える。

氏は、宇野経済学を、いわゆる「三位一体」の内的構造への反省を欠いた「未分化状態」から生ずる卑俗な政治主義やイデオロギー主義（典型「スターリン主義」）に抵抗して、

「マルクス主義哲学本来の立場に立つて…科学的認識の科学性をまもろうとした…もともともすぐれた実例」<sup>(1)</sup>、「国際的な水準からいってもその問題意識とその体系化の成果においては群をぬいている」<sup>(2)</sup>ものとして、高く評価される。氏によれば、宇野経済学の理論体系が「思想的基軸を欠いている」という

ことはできない。むしろマルクス主義経済学の思想的核となるものを「事実としては前提して」いる。<sup>(3)</sup>しかし、「主観的にそのような価値意識を前提しているということ」と、この前提をその認識体系の論理のなかに内面化しているかどうかということは、別の問題<sup>(4)</sup>なのであって（この指摘はきわめて重要！）、宇宙理論のばあい、価値と存在、思想と科学、理論と実践、論理と歴史の結合をそれなりに志向しながら、しかもそれらの内面的結合の論理をもたないために、それどころか「結合の論理そのものを対象化するという問題意識」そのものが「除外」<sup>(5)</sup>されているために、もっぱら「分離の論理」「区別の論理」に終始しており、したがって、「結合」は外的な移行・依存関係（思想から科学へ、論理から歴史へ、理論から実践へ）に解消されている。「経済学の理論と変革の思想との関係も、理論体系内部に結節点をもつことができなから、どうしても外的な関係で結びつくほかない」<sup>(6)</sup>。

「△実践▽は、三段階論のどこにも内的な必然性をもって位置づけられてはいない。実践はきわめて狭い意味での政治的実践に限定された上で、単に△現状分析▽が生みだす理論と外的に結合することを要求されるだけで、その要求の内的必

然性はこの原理体系のどこにもない」<sup>(7)</sup>。

これはきわめて鋭く、かつ正しい分析である。だがそうだとすれば、——宇宙理論においては哲学・科学・実践の三契機が分断され外的に結合されるだけで、内面的結合の論理が欠落しているとすれば、それは「マルクス主義哲学本来の立場に立つ」ものとはいえないのではなからうか。

- (1) 『革新思想』二六六—七七ページ。
  - (2) 『思想と科学』三八ページ。
  - (3) 『革新思想』二六七ページ。また、『思想と科学』一〇八ページ——「宇宙経済学による原理論は、資本制社会においては人間的労働はその商品形態において全く転倒された形において実現されていること、そしてこの社会はこの転倒を正すべき原理をそれ自身の内にもっていないことをあきらかにしたものであり、その点では資本論の意図を純粋に継承している」。
  - (4) 『思想と科学』一〇八ページ。傍点は引用者。
  - (5) 『革新思想』二七六ページ。
  - (6) 『革新思想』二七二ページ。
  - (7) 『思想と科学』八九ページ。
- 佐藤金三郎氏の次の指摘も参照するべきである。——「宇野教授の△三段階論▽は、一般にはマルクス主義の核心をなす論理と歴史、理論と実践との統一をひきはな

すものとして批判されている。この批判は、基本的に正しいものと考ええる。けれども…より正確に言えば、教授の「三段階論」は、論理と歴史、理論と実践のそれぞれ両者をあらかじめ峻別したうえで、論理から歴史への、理論から実践への段階的接近をめざすものということができよう。」（『思想』一九六〇年二月号、一五四—五ページ）

## 4

マルクス主義がいわゆる「三源泉」の「継承・完成」（レニン）に成立するものであることは、一般に認められてきた。宇野氏もこの点では例外ではない。だが問題の核心は、この「三つの構成部分」の統一の論理構造、「三位一体」の結合原理をいかに把握するかにある。端的に言って、『資本論』が徹底的・根底的な「経済学批判Ⅱブルジョア経済体制の批判」でありえているのは、またそうではかありえないのは、どのような論理的根拠にもとづくものであるか。この問いにたいして梅本氏は、次のような解答の基本線を与えておられる。——ブルジョア社会への批判が根底的であるためには、「一定の歴史観にもとづいた価値基準の定立」がなければならぬ。マルクスは「人間と労働との本質的關係」を核心

とする唯物史観によって「トータルな人間像」を定立し、これを「指導力」として資本主義社会の「本質的分析」をおこなうとともに、他面後者によってかれの人間把握に科学的基礎づけを与えた。<sup>(1)</sup>マルクスによる経済学批判は、「その本質において、ブルジョア社会における人間的疎外にたいする全人間史を背景とした哲学的把握を指導力としている」<sup>(2)</sup>のであって、この意味で「人間の自己疎外とその回復ということが、マルクス主義を一貫してつらぬく思想的根幹」<sup>(3)</sup>である。ではこのような、歴史観・人間観と経済学Ⅱ経済体制批判との、理論的批判と実践的批判との内的結合は、どのような場において成立するか。ブルジョア社会とそこにおける人間疎外にたいする実践的批判的な「価値意識」、この認識の「実践的契機」は、いかにして認識体系の論理そのもののなかに「内面化」されうるのか。この問題は、マルクス主義における認識の主体と対象の構造、認識の始元の構造を問うことにほかならない。梅本氏によれば、マルクス主義的認識の主体は、「人間否認が遂行される集約点」としてのプロレタリアト<sup>(4)</sup>、「自己自身の外化である商品とむかいあっている労働者」<sup>(5)</sup>であり、労働者の対象否定Ⅱ自己否定の「実践的感性」こそ、

認識の始元をなす。これは、それ自体としては即自的・主観的な始元ではあろう。だが、この「実践的感性」の場において、「人間と労働との本質的關係」が、そしてそれを指導力とする経済学批判が追究・展開されたのであり、そして他面、その成果としての理論的・体系的認識によって、出発点としての認識の実践的始元そのものの客観性・歴史的必然性が証明されたのであった。<sup>(7)</sup> このような、それ自体資本主義の歴史的运动によってのみだされるプロレタリアートの「実践的感性」を始元としエレメントとしつつ、対象認識によって始元そのものの客観性・必然性を根拠づけていく円環的過程、「人間の意識と現実との相互貫徹の過程」<sup>(8)</sup>としての弁証法、これこそ、「人間の自己疎外とその止揚」を思想的根幹とするマルクス主義体系の、内面的結合の論理にはかならない。

以上の梅本氏の所論には、若干の問題点がないわけではない。<sup>(注)</sup>しかしそこには、マルクス主義の「三位一体」の論理構造が、それを成立せしめる認識論の根拠の問題にまでほりさげて——これなしに「統一」「結合」をいっても、それはたんなるフレーゼにとどまる——きわめて適確にとらえられているといつてよいであらう。

かつてルカーチは、マルクス主義から哲学・世界観の問題を排除し、理論そのものに内在する実践の契機を消去して、マルクス主義経済学を（のみならず唯物史観をも）個別科学・実証科学に解消しようとした第二インターの理論的指導者たちへの批判を念頭において、「正統マルクス主義とはなにか」という問題を提起し、みずからこれに答えていった——「マルクス主義の諸問題における正統性は、もっぱら方法にかかわる」<sup>(10)</sup>と。ここにいう「方法」は、いうまでもなく「唯物弁証法」にほかならない。そして唯物弁証法の「本質」を規定して次のように書いている。「唯物弁証法は革命的弁証法である。……このばあい重要なことは、理論と実践の問題である。それも、『理論はそれが大衆をとらえるやいなや物質的力となる』という意味においてだけではない。むしろ理論のなかにも大衆をとらえる仕方のなかにも、理論を、弁証法的方法を革命の動輪とするような契機や規定が見つけたされねばならない。つまり理論の実践的本質が、理論および理論とその対象との関係から展開されねばならない」<sup>(11)</sup> すなわち、理論と実践との統一は、それぞれ独立したものとしての理論と実践の相互関係・交互作用としてのみとらえられるべ

きではなくて、理論それ自体のなかに、また対象・現実にたいする理論のかかわり方のなかに、実践の契機が理論の本質として包含され定着されていなければならない。このような理論と実践との内的統一、革命的弁証法の成立する場をルカーチは「プロレタリアートの立場」にもとめ、そして弁証法的方法の中心的规定、「それなしには弁証法が革命的方法でなくなる」本質的规定として、「歴史過程における主体と客体との弁証法的関係」を強調するのである。

ルカーチのこの主張にかんするかぎり、それは、梅本氏の見地とまったく一致するものといつてよいであろう。そしてまたそれは、基本的な問題視角としては、梯明秀氏の「実践的直観の立場」ともあい通ずるものである。

主として梅本氏の所説を手がかりとしておこなった以上の考察からわれわれは、マルクス主義の基本性格、マルクス主義における「正統」の基準として、相互に不可分な次の三点をあげることができるであろう。

- ① マルクス主義は哲学・科学・実践の「三位一体」である。それがまさに「三位一体」であるためには、
- ② 「統一の論理」が体系そのものに内面化されていなければ

ばならない。この「統一の論理」は、

- ③ プロレタリアートの「実践的感性」に成立し、「人間の自己疎外とその止揚」を思想的根幹とするところの、「主体・客体の弁証法」である。

- (1) 『革新思想』二六八ページ以下、「思想と科学」一〇五ページ。
- (2) 『思想と科学』一三七ページ。
- (3) 同右、四五ページ。
- (4) 同右、一〇四ページ。
- (5) 同右、一一七ページ。
- (6) 同右。
- (7) 同右、一〇四―五ページ。
- (8) 同右、一〇一―二ページ。
- (9) 「哲学における新カント主義的潮流の影響をつよく受けた新マルクス主義のマルクス文献は、マルクス主義とは社会と歴史における諸事象の因果法則的経過を研究し、したがって『世界観の問題』との内的本質的関連をまったくもたない個別科学だとみなしている。このような、マルクス主義の『実証科学』としての理解」。——例、ベルンシュタイン、マックス・アドラー、ハインリヒ・クノウ。Josef Révai, Literaturbericht über G. Lukács' Geschichte und Klassenbewußtsein.



Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung, 11. Jg. 1925, S. 227f.)

「正しく理解された唯物史観、すなわち理論的には弁証法的に実践的には革命的に理解された唯物史観にしたがえば、革命的実践から切りはなされた、学問的に無前提で純粹に理論的な研究など存在しえないし、同様にまた、独立して並存する孤立的な個別科学も存在しえない。にもかかわらずマルクス以後のマルクス主義者たちは、事実としては、科学的社会主義を、政治的実践やその他の階級闘争の実践と直接の関係をもたない純粹に科学的な認識の合計のように理解してきた」。——例証、メーリング、カウツキー、とくに典型的定式化としてヒルファディングの『金融資本論』『序文』。(Karl Korsch, *Marxismus und Philosophie*, 2. Aufl. 1930, S. 79 ff.)

ヒルファディングはそこ(岡崎次郎訳岩波文庫、上巻一二一四ページ)で、マルクス主義を、「因果的関連の暴露のみを目的とする」「論理的に科学的な、客観的な価値判断から自由な科学」と規定して、「社会主義」「実践的行動」から切りはなしたうえで、「しかしマルクス主義が与える社会の運動法則の洞察は、これを身につけたものにつねに一つの優越性を与える」として、科学と階級実践との外的結合をおこなっている。宇野氏経済学方法論は、こういった見地を方法的に「純化」したも

をいえる。

(10) ルカーチ『歴史と階級意識』第一論文「正統マルクス主義とはなにか」。Geschichte und Klassenbewusstsein, 1923, S. 13. 平井俊彦訳「ローザとマルクス主義」ミネルヴァ書房、一七ページ。

(11) A. a. O., S. 14. 訳書一七一八ページ。

(12) A. a. O., S. 15. 訳書一九二ページ。また『歴史と階級意識』第四論文「物化とプロレタリアートの意識」第三節における詳細な論述を参照せよ(平井俊彦訳『歴史と階級意識』未来社、一四七ページ以下)。

(13) A. a. O., S. 15. 訳書二二二ページ。

(注) 梅本氏の所論のはらむ基本的な問題点として私は、氏における「人間観の科学による媒介」の内容的追究の欠如を指摘しておく。

人間観と科学との相互媒介の論理は、本文の要約にも見られるとおり、梅本氏によってその成立根拠にまでほりさげて明確に定式化されている。だが「相互媒介」の内容的追究は、人間観・歴史観による科学の媒介、唯物史観による経済学の基礎づけの側面に限られて、人間観、「トータルな人間像」そのものが、科学的認識の深化とともに深まり具体化されていく側面が、内容的に追究されていないのである。このために、氏のすぐれた「唯物史観」把握や「疎外論」把握も、一定の抽象性を免れな

いこととなっている。

まず氏の「唯物史観」理解について。梅本氏が唯物史観を「いわゆる定式の文章にだけ固定化することに反対」され、唯物史観の「核心」をなすものは「人間と労働との本質的関係であり、その弁証法である」といわれるとき（『思想と科学』一一八ページ）、それはきわめて鋭く示唆に富む洞察である。だが、この「核心」について氏は、「人間と労働との本質的関係」という一般的规定以上の内容規定を与えておられない。もつとも、『人間論』（三一書房一九六二年）所収の「マルクス主義における人間の問題」のなかで、主として『経哲手稿』をとりあげてこの点の追究がおこなわれている。だが氏自身そこでいわれるように、『経哲手稿』において「マルクスにおける人間の基調は確立されたといつてよい」（一〇一ページ）にしても、「ここでのマルクスの労働概念をもって、 $\wedge$ マルクス労働論の確立 $\vee$ などというのは、あやまりである」（九二ページ）とすれば（そしてたしかにその通りだと私も考えるのだが）、初期マルクスの人間観・労働論の確認にとどまらないで、経済学批判の進行にともなう「人間と労働との本質的関係」把握の内容的深化を具体的に追究し、『経済学批判要綱』や『資本論』におけるマルクスの人間観・歴史観の到達点を摘出・説明することが、ぜひとも必要なので

はなかるうか。

人間観・歴史観の内容把握における不徹底は、当然ながら梅本氏の「疎外論」理解にも無視できない問題性をはらませている。

氏は、私有と分業による階級の発生以来人間はその本質を喪失してきた、階級の止揚によって人間本質は回復されるのだ、といった疎外論理解を、「本質喪失史観」と名づけて批判され（『思想と科学』一〇五、一二九ページ、『革新思想』二六九ページ）、疎外から「還帰」すべき人間本質・人間像は「疎外の中で創造され発見されてゆく」のだと主張される（『思想と科学』一二八ページ以下）。これは重要な論点であって、資本主義とその発展のうちに物象化と疎外の深化発展だけしかみない一面的把握や客観主義的・過程的な疎外論理解、さらには終末観・千年至福説的ブルジョア疎外論にたいする批判の立脚点を提供するものといえる。たしかに還帰すべき人間本質は過去にはない。現在における疎外と対象化との弁証法的矛盾構造の中にそれはある。しかし、人間の自己疎外とその止揚の問題にすぎるとき、人間本質の不断の創造としての人間の自己対象化 $\parallel$ 労働が、自己疎外、疎外された労働としてしか発現しえないその根拠と必然性は、人間と自然との物質代謝過程としての労働そのもののなかにではなく、労働過程がそのもとで営まれる生産諸関係のう

ちにこそ求められなければならない。したがって、資本主義社会のあらゆる生活領域にみられる対象化の疎外への転化・転倒が経済的生産諸関係の変革によって一挙に消滅するものではないにしても、資本主義のもとにおける疎外と社会主義のもとにおける疎外とは明確に区別されねばならないであろう。にもかかわらず、「外化が疎外となるのは、階級社会の発生によってでもなく、したがってまた階級社会の消滅によって、外化が疎外にならなくなってしまうものでもない」（『思想と科学』一三〇ページ）といわれる梅本氏のテーゼは、少なくとも一面的であり、疎外の基底をなす生産関係の差異への正当な考慮を欠いて「疎外」の歴史的一般化に導くときには、誤謬に転化する。そして「疎外論」把握のこのような不確かさは、資本主義社会の科学的分析・経済学批判をつうじて（マルクスによって）説明され、また（われわれによって）説明されるべき「外化と疎外の弁証法」、「本質実現」と「本質喪失」の弁証法的矛盾構造の内容的追究が、不徹底なままにとどまっていることの一帰結といえるのではなからうか。

梅本氏の唯物史観ならびに疎外論の独自の把握は、一面においてきわめて積極的な意義をもち、唯物史観をいわゆる「定式」の文章に固定化して理解し、また資本主義のもとにおける人間の「本質実現」の契機、資本主義

の歴史的必然性と積極性を無視する傾向をもつ宇野理論にたいしても、有効な批判の基礎を提供するものである。しかしそれが、人間像・人間疎外論の科学による媒介の内容的追究を欠くとき、経済学による唯物史観の「論証」の側面のみを強調する宇野理論の「科学主義」の一面性にたいして、人間観・歴史観による経済学の基礎づけ・媒介のみを強調する一面的な「人間主義」におちいる危険をはらむこととなるであろう。ただしこの危険をふせぐ論理は、梅本氏においては与えられている。この論理の内容的充実は、梅本氏とともにわれわれに課された課題といわねばならない。

なお、この課題の追究にさいして、杉原四郎氏の諸著作は重要な手がかりを与えるものである。『経済学批判要綱』のなかの、「時間の経済、すべての経済は結局はそこに解消される」等のテーゼに着目し、これが手がかりとして展開される氏の所説は、マルクスにおける人間観と経済学、疎外論と経済理論との相互媒介的発展の成果としての「経済本質論」（それは同時に人間本質論でもある）を抽出し、これをポジティヴに編成・深化・展開しようとする試みであって、「労働費用論」「原始的疎外」といった構想にはなお検討されるべき余地があるといえ、「時代の運動があたらしい人間の本質を要求している」（梅本氏）こんにちにおけるマルクス主義・マ

ルクス経済学の発展にたいして、一つの基礎視点をそれは提起しているものである。（杉原氏の論稿としては、四の1の注（2）にあげたもののほか、『経済学・歴史と理論』（未来社一九六六年）所収の「経済の本質に関する一考察」、杉原・佐藤編『マルクス経済学』（有斐閣一九六六年）、など参照。）

## 5

右にみたように、プロレタリアートの「実践的感性」に成立する「人間の自己疎外とその止揚」の理論と実践、これをつらぬく「主体・客体の弁証法」が、マルクス主義をマルクス主義たらしめる基本的な方法原理、「統一の論理」であるとするならば——そして私はそう確信するのだが——、宇野氏の体系と方法はこれとはあまりにもへだたるところ遠いものではなからうか。

宇野経済学は、梅本氏も確証されるように、「認識の主体を対象の外部にだけおいて」<sup>(1)</sup>いる。認識主体としての人間は、いかなる思想・主義主張をもっていないようが、経済学的認識の主体としてはそれらから自由に、純粹客観的に、外なる対象世界に思惟的に浸透しこれを反映しなければならぬ。ここ

に設定されている認識の構造は「外的反省」のそれであり、そこでの思惟作用は、観察し区別し共通物を抽出する悟性であって、それ以上のものではない。「悟性としての思惟は、固定した規定性と、この規定性の他の規定性にたいする区別とにたちどまっており、このような制限された抽象的なものがそれだけで成立し存在すると考えている」（ヘーゲル<sup>(2)</sup>）。

このような悟性の立場にたつものであるかぎり、「宇野原理論が一般性をきわめて形式論理的な意味での∧共通性∨とだけ理解し、∴∧一般性∨の中から発展の原理を欠落させてしまった<sup>(3)</sup>」こと、思想と科学、理論と実践、論理と歴史が切断されていること、しかもそれが論理の中に内面化されていない外的「前提」としての「マルクス主義の思想的核心」に忠実に「体系化」を志向するかぎり、論理的に切断したものの「外的結合」を試みるほかないこと、これらはまったく必然的なことであり、宇野理論の「認識の始元」の首尾一貫した論理的帰結なのである。もとより悟性は、学問に不可欠な思惟の一機能であって、これなしには科学は成立しえない。しかし、悟性の立場を徹底して、もっぱらこの見地から体系を問題にするときには、「有機的に一体をなしている諸契機を相

互に偶然的に關係づけ、たんなる反省的連関におくところの、粗雑な没概念性」(マルクス)<sup>(4)</sup>におちいるほかはない。宇野理論のもつ意義と境界は、 $\wedge$ 徹底した悟性主義 $\vee$ のもつ意義と境界として確定されるべきであろう。

この視角からみるならば、宇野理論のもつ唯一の積極的な意義は、「三位一体」の俗流的理解(というよりも無理解)から生ずる卑俗な政治主義・イデオロギー主義に抗して「分化」の必要をとなえた、その問題意識にのみ認めることができるであろう。だが、俗流的な未分化にたいして分化をとくだけでは、論理的には同一次元での対立である。問題の本質は分化か未分化かではなく、分化・未分化の統一の論理構造、「三位一体」の区別と統一の構造の追究にあるのでなければならぬ。

したがって問題を意識したこと自体は正当であり貴重であったとしても、その問題意識の内容およびそれにもとづく問題追究の方向は、まちがっていたといわねばなるまい。ましてやその「体系化の成果」において「國際的水準からいっても群をぬいている」とは、お世辞にもいえないのではないか。むしろ悟性主義の徹底による体系的・理論的破産(岡

崎・佐藤氏の指摘される「内部矛盾」、宇野学派の「内部分裂」はその端的な例証である)をつうじて、マルクス主義・マルクス経済学が本来いかなるものであり、またいかなるものとしてとらえられてはならないかの基準について、逆照明的に貴重な示唆を与えているという意味で、それは「國際的水準をぬく」重要な業績といふべきである。

- (1) 『思想と科学』七八ページ。
- (2) 『小論理学』八〇節、岩波文庫上巻、二四〇ページ。
- (3) 『思想と科学』八二、八七ページ。
- (4) 『経済学批判、序説』、『経済学批判要綱』原書一〇ページ、『マルクス・エンゲルス全集』一三卷、原書六二〇ページ。
- (5) 宇野理論にたいしてきわめて鋭い原理的批判をおこなわれる梅本氏が、にもかかわらず宇野理論をその「体系化の成果」においても高く評価されることは、奇妙なことである。氏の『思想と科学』を読んでも、宇野氏の体系から内容的・積極的に摂取しておられるものは皆無といつてよい。「認識の始元成立をめぐる歴史発展の内的弁証法的構造」の考察をまったく「除外」する宇野理論と、梅本氏のマルクス主義理解とは、およそその原理を異にする二つの体系であって、両者の間での内容的、相互、摂取は本来不可能なことではなからうか。原理を異に

する二つの体系のあいだでは、結局のところいづれか一方の見地にたつて、骨抜きにされ形骸化した他方の体系を「撰取」することか、他方の体系の提起する問題ないしは問題意識をうけとめこれにたいして自己の見地から解明をあたえるといった「交流」しか、成立しえないように私には思われる。

基本原理を異にする二つの体系の「交互媒介的止揚」を試みて失敗している好例が、黒田寛一氏の『宇野経済学方法論批判』である。氏は、梯経済哲学から「批判的に撰取」した「実践的直観の立場」にたつて、宇野経済学の「哲学的客観主義」を鋭く批判される。ところが反面、宇野理論における理論と実践、思想と科学の分離は、「あくまでも外観であつて、その本質をなすものではない」といわれるのである（一六、二七ページ）。だが、「認識主体の場所的立場を欠如」している体系において、どうして理論と実践、思想と科学の「本質」的結合をいいうるのであろうか。そこにはまさに「機械論」的・外的な結合（二八ページ）しかありえない。それは、「人間社会自身に本来的な社会関係をなすものではない」商品経済、労働力商品化という根本的「無理」に立脚する経済法則（宇野『マルクス経済学原理論の研究』九ページ）の「廃棄」を要請するゾレンの論理であつて、現存するものの肯定的理解のうちに否定的理解を

ふくみ、否定的理解のうちに肯定的理解をふくむ「本質的に革命的な弁証法」（マルクス）とは異質のものである。理論体系におけるこの「原則問題」を没却して、ただ「反スターリニズム」の一点で宇野理論と梯経済哲学を並置し両者の「交互媒介的止揚」をめざした黒田氏は、結局のところ、「普遍的本質論」「特殊の形態論」「個別の現状分析」（一八三ページ）と名をかえた「宇野三段階論」を、「場所的立場の非連続性」「抽象のレベル」といった没概念的な「場所の論理」で裏うちした、外見上の折衷論、本質的には「 $\wedge$ 実践的直観の立場 $\vee$ をツギ穂した宇野三段階論」（佐藤金三郎氏）、梯経済哲学で粉飾された宇野理論に到達している。（学的体系の「論理的段階構造」、「抽象のレベル」を唱えることそれ自体は正当である。しかしその「段階」が、「原理論」「段階論」あるいは「本質論」「形態論」に機械的に分断され、そしてただそれに対応して「抽象のレベル」がいわれるとき、それは没概念的ご都合主義に転化する）。ここでは「実践的直観の立場」は形骸化せられて、もっぱら、宇野理論の「哲学的客観主義」の相互補完的対極をなすところの、理論と実践の上での「主観主義」の立場点となつているのである。

まことに宇野氏の見地は徹底したものであって、悟性主義的立場から考察するとき生ずるマルクス主義・マルクス経済学の諸問題をいわゆる『資本論』の「難点」として抽出され、氏の見地からする解決（『資本論』の「原理論」としての「科学的純化」）をこころみてこられた。これらの氏の抽出される個々の問題点については、たしかに、マルクス・エンゲルスの諸命題を復唱し対置させるだけの「排撃的批評」に終始してはならないであろう。基本原理の差異を明確にし、その上で宇野氏の摘出される諸論点についてマルクスの原理的方法にもとづいての具体的説明を与えることによつてはじめて、真に「批判」の名に値いするものとなりうるであろう。そして△論理と歴史√の関連の問題は、こういった問題点のもっとも重要なものの一つであると思われる。

ここではこの問題についてちがひつた「具体的説明」をおこなうだけの準備を私ほもたないし、またその場所でもない。たださしあたり次の二点だけは確認しておいてよいであろう。

(1) マルクスにおいて論理と歴史との統一は、いわゆる「三位一体」の内面的統一の論理が成立すると同一の場において、基本的には同一の論理構造をもつものとして成立する。

すなわち、歴史的發展の過程とその問題性を、みずからそのなかに身をおきつつ、変革の実践の視点から主体的にうけとめる認識と行動の主体、その「実践的直観の立場」にそれは、根柢をおくものである。したがってマルクスの方法は、基本的に、現在に成立する論理的方法である。しかし、現在の変革<sub>1</sub> 将来を見すえた現在の理論的把握が徹底的・批判的・現実的でありうるためには、過去への反省的省察が必然的におこなわれなければならない。この意味で、それは、現在の変革的立場に成立する歴史的方法である。このような見地からすればわれわれは、エンゲルスとともに「論理的取扱いは、実際は、歴史の形態と攪乱的偶然性をとりさつた歴史の取扱いはかならない」といつてすませていくわけにはいかない。「攪乱的偶然性をとりさ<sub>2</sub>」る基準は現在に、現在の變革的立場に成立するのである。

(2) したがって『資本論』冒頭の「商品」の性格規定についても、それがもつばら論理的方法にもとづく資本主義的商品であるという規定だけにとどまっているならば、それは一面的・抽象的な理解といわねばなるまい。宇野氏が冒頭商品について、一方では資本主義的商品と把握されながら、他方で

それが歴史的単純商品にも共通する規定をふくむといわれるとき、そのこと自体があやまりなでは決してない。問題は、この二つの命題をつなぐ論理が欠落していること、一方で冒頭商品は「資本主義的生産関係の中心基軸とでもいふべきものを純粹に表示するもの」といわれながら、同時に無媒介的にこれを「流通形態」に解消しこの規定性において「歴史V」を密輸入して「体系」を構成する、その論理的「没概念性」にある。岡崎氏のいわれる「論理的首尾一貫性の欠如」は、まさにこの意味でなければならぬ。(1)にのべた見地にたつて冒頭商品（のみならず『資本論』体系全体）の論理的「歴史的」性格規定を具体的に解明することこそ、われわれにとつての課題であるといえよう。

(1) 平田清明氏の簡潔な定式化——「マルクスにおいて、歴史的過去の省察は歴史的現代の理論的把握を通ずることによってなされるのであり、歴史的過去の内在は自己目的ではなくて、つねに歴史的現代の批判的認識を可能ならしめるものである。このような論理的「歴史的方法」は、マルクスの全著述を特徴づける」。(「マルクスにおける経済学と歴史認識（上）」、『思想』一九六六年四月号、一一ページ)。

レヴァイは、さきに引用した『歴史と階級意識』の書評のなかで、ルカーチの主張を要約しつつ述べている——「ヘーゲルにたいするマルクスの大きな進歩は、かれが歴史における同一の主体・客体をプロレタリアートのなかに具体的に見出したことにある。マルクスは歴史を、ヘーゲルのように原理的に完結した過程として事後的に、まったく観想的に考察したのではなく、社会主義社会をめざすプロレタリアートの闘争のなかに、現在の弁証法的な把握のなかに、これまでの歴史を歴史として、および、その意味で必然的な事象として理解しうる立脚点を見いだした。……総体としての歴史過程の理解は、現在が過去の歴史を自分自身の過去として概念的に把握しえたときにのみ可能となる。過去の諸時代は、現在を対象とし、これを変革する主体の立場からのみ、歴史として概念的に把握されえたのである」。(Reval, a. a. O., S. 231.)

(2) エンゲルス「カール・マルクス『経済学批判』」マル・エン全集一三巻、原書四七五ページ。  
見田石介氏は『資本論の方法』で、エンゲルスのこの命題を「論理」歴史説」すなわち論理と歴史の無媒介的一致説の典拠とすることは、エンゲルスの文章の前後の関連を無視した断片的で恣意的な引用であると批判しておられる（二三七—二四〇ページ）。だが私はそうは思わない。不明確さ、むしろ誤謬は、エンゲルス自身にあ



ると考える。そこでエンゲルスの命題を、前後の関連において若干吟味しておきたい。

エンゲルスは、「マルクスの経済学批判の基礎をなしている方法の完成を、われわれは、その意義において唯物論的根柢見解に劣らない成果であると考え」といつて、これにつづく文節で、およそつぎのように述べている（前掲書四七四―五ページ）。

(1)ヘーゲル弁証法の批判的継承として獲得された方法にしたがっても、経済学の批判は二とおりのしかたで可能であった。すなわち、歴史的に、あるいは論理的に。

(2)だが歴史的方法、すなわち歴史の発展あるいはその文献史的発展にそくした考察方法をとるばあいには、歴史はしばしば飛躍的にかつジグザグに進むために思考の進行もしばしば中断されねばなるまいし、その上、歴史的叙述のためにはあらゆる準備作業が欠けているがゆえに仕事は限りないものとなるであろう。こうしたわけで、論理的取扱だけが適当なものであった。

(3)ところがこの論理的方法は、実際には、歴史の形態と攪乱の偶然性とをとりさつた歴史的取扱いにほかならない。この歴史の始めが、思考行程の始めでもなければならぬ。そしてそれ以後の思考の歩みは、抽象的で理論的に一貫した形式における歴史的経過の映像、

それぞれの契機が十分に成熟し典型的形態をもつにいたつた発展時点で考察されうることに、現実の歴史的経過そのものが与えるところの諸法則によつて修正された映像にほかならない。

エンゲルスの右の解説は、『経済学批判、序説』の「3. 経済学の方法」におけるマルクスの見地とは、いちじるしく趣を異にするものである。すでに周知のように、マルクスはそこで、

(1)経済学批判の方法が、近代ブルジョア社会をつねに前提として表象にうかべつつ、下向・上向をつうじて具体的ものを精神的に具体的なものとして再生産するための思惟にとつての方法、論理的方法であることを明確にし、つづいて

(2)単純な範疇から複雑な範疇への論理的上向と実在的な歴史的發展との関連を問うて、一方では、一定の限定のもとでは抽象的思惟の上向の歩みが現実の歴史過程に照応することを明らかにしつつ、他方、「労働」の例をあげて―もつとも抽象的な範疇でさえ、その抽象性のゆえにすべての時代にたいして妥当するとはいへ、この抽象という規定性の点ではそれ自体歴史的關係の産物であり、もつとも發展した諸関係の内部においてのみ完全な妥当性をもつことを指摘している。

(3)以上の考察のちにマルクスは、経済的諸範疇の展

開序列を規定して、つぎのように明記している。――

「経済学的諸範疇を、歴史的にそれらが規定的な範疇であった順序でならべるとは、実行できないことであり、また誤りであろう。むしろそれらの序列は、それらが近代ブルジョア社会で相互にたいしてもつ関係によって規定されているのであって、この関係は、歴史的発展の系列に照応するものとはちよほど反対である。ここで問題なのは、経済的諸関係が種々さまざまの社会諸形態の継起のうちに歴史的にしめる関係ではない。問題なのは、近代ブルジョア社会の内部でのそれらの仕組である。」（前掲書六三一―九ページ）。

マルクスのこの文言と対比するとき、エンゲルスが、(1)「論理的方法」と対等の資格で「歴史的方法」を定立していること、(2)「歴史的方法」にもとづく叙述は実際上実行不可能であったために「論理的方法」がとられた、といった、「論理的方法」の便宜的・偶然的な根拠づけ、(3)論理的展開を「歴史的経過の修正された映像」といいながら、問題の要点である「修正」の基準・見地を明確に追究していないために、結局のところ論理的方法の歴史的方法への解消に帰着していること等は、いずれもマルクスの方法の解説としては不十分であり、むしろ端的にいつて誤りであるといわねばならない。

マルクスの経済学批判において問題なのは、近代ブル

ジョア社会の内部における経済的諸関係の仕組である。「ブルジョア経済の諸法則を展開するためには、生産諸関係の現実の歴史を書く必要はない。だが、それ自身歴史的に生成した関係である生産諸関係の正しい観察と演繹は、つねに、この体制の背後によこたわる過去を指示する最初の諸方程式へとみちびき、この示唆は同時に現在の正しい把握とともに過去の理解への鍵を提供する。同様に他方この正しい考察は、生産諸関係の現在の形姿の止揚の示唆される点にみちびく。」（『経済学批判要綱』原書三六四―五ページ）。このようなものとしてマルクスの方法は、あくまで眼前のブルジョア社会の構造把握を軸としつつ、そのうちに過去の理解と未来の構成の鍵を見出すところの、論理的歴史的方法なのである。

エンゲルスは、さきに要約した文節につづいて、経済学批判の方法が、「われわれが眼前にみいだす最初の経済的関係」、「完全に発達した商品」から出発し、その分析・総合の過程において「歴史の例証、現実との不断の接触を必要とする」ところの論理的歴史的方法であることを、事実としては正しく説いているのであるが（前掲書四七五―七ページ）、しかし、すでにみたように、これが唯一の必然的な方法であることの積極的な根拠づけを与えていないのであって、そのかぎり、エンゲルスは「マルクスの経済学批判の基礎をなす方法の完成」

を高く評価しながらも、その「意義」においてはきわめて不十分にしか理解していなかったといわざるをえない。

(3) この課題遂行のための方法的原理と、それにもとづく冒頭商品の論理構造の解明は、梯明秀氏の諸著作、とくに『ヘーゲル哲学と資本論』ならびに『資本論への私の歩み』（現代思潮社一九六〇年、第三部Ⅲ、Ⅳ）において、基本的には果たされている。とはいえ、『資本論』における論理と歴史の関連が問われるばあい、問題の焦点は、マルクス以後の資本主義の歴史的發展と現代資本主義・社会主義の経済学的解明にたいして、『資本論』の論理と理論がいかなる意義をもち、それをどのようにに発展・展開させるべきか、その方法的論の確定にあるといえようが、この点について梯氏の「開かれた体系としての資本論」の提唱は、基本原理を明らかにしているものとはいえず、その具体化のためには、氏自身明記しておられるように、なおさまざまな重要な問題を残している。すなわちまず第一に、「商品論」だけでなく『資本論』体系全体にわたって、第一、第二、第三巻の論理の関連の問題をはじめ、「叙述の発展段階の一つ一つについての弁証法」の解明がおこなわれなければならないし、第二に「プラン問題」との関連について、さらには第三に、『資本論』と『帝国主義論』、『現代資本主義論』との論理的・理論的関連についても、なお多くの問

題が究明されなければならない（『資本論への私の歩み』二八五—六ページ参照）。

これらの問題点の解明、いいかえれば梯氏的方法論の経済学的・経済理論的具体化にとって、『産業資本主義の構造理論』における堀江英一氏の透徹した構想は、注目すべき示唆を与えるものである。

## 7

さいごに、田中氏の提起されたプレハーノフの「正統主義」・「客観主義」の問題について、若干の付言をおこなっておきたい。マルクス主義における「正統」の基準についてはさきにふれた。したがって以下は、その見地からの補足的な考察にとどまる。

プレハーノフの「正統マルクス主義」の歴史的地位についてバロンは、田中氏も注目される『プレハーノフ』の序文のなかで、つぎのように論じている。——「プレハーノフは、ベルンシュタインの修正主義とレーニンのボルシェヴィズムという当時のイデオロギー上の二大偏向に反対して、もっともねばりよくたたかっていた正統マルクス主義の指導者であった。だが皮肉にも、かれの反修正主義キャンペーンはボルシェヴィズムの勃興をおおいに助長し、反面のちにかれがボル

シェヴィズムにはこ先をむけたとき、かれは知らぬまにみずから修正主義にすべりこんでいた。かれは、自分の体系の構成要素間のバランスをときは失うことがあったにもせよ、およそ可能なかぎり正統マルクス主義の防衛に尽力した。にもかかわらずかれのキャンペーンは、いずれの方向でも成功をおさめなかった。西では修正主義が、ロシアではボルシェヴィズムが勝ち、正統マルクス主義は足場を失なった。ブレハーノフの運命からわれわれは、二十世紀においては正統マルクス主義は、変貌する西側の社会にたいしてもロシアのよくな後進諸国にたいしてもはや適合しないことを、見ぬくことができるであろう<sup>1)</sup>。

ここには、興味深い問題提起が含まれてはいる。が、われわれにとつての問題は、ブレハーノフの擁護した「正統マルクス主義」、二十世紀にはもはや足場を喪失した「正統マルクス主義」の内容、正体にこそある。これを田中氏は、理論と実践における「客観主義」と規定された。おそらくこの規定は正しいであろう。だが、研究会の席でも指摘されたように、ブレハーノフの「客観主義」はミーチン以後の平板な唯物主義的客観主義とも異なるし、また宇野理論の悟性主義的客観

主義とも、その構造と意義を異にするものであろう。とすれば、ブレハーノフの「客観主義」の特質と根拠が、いっそうたちいって究明される必要があるように思われる。

ブレハーノフは、マルクス主義の外でも内でもヘーゲルが忘却され、一般にマルクス主義の哲学的契機が否認されていた第二インターの時期にあつて、マルクス主義の固有の哲学的基礎を重視し、これにたちいった考察をくわえた数少ない理論家の一人、レーニンを除いてはおそらく唯一の人であつた。その名著『史的・一元論』（一八九五年）においてかれは、マルクス主義の哲学的基礎を、ヘーゲルを媒介とする一八世紀フランスの形而上学的唯物論の止揚に成立した「弁証法的唯物論」と特徴づけ、その根本特質を、経済的必然性と人間の意識・心理・理性との、土台と上部構造との交互作用はこれを十分に承認しながらも、「交互作用の見地を超越」して歴史の総体的・一元的な把握を達成したところに求めている。この見地からかれは、唯物史観の内容を詳細かつ見事に解説して、当時のロシアの主観主義的空想論者たち（ミハイロフスキーらナロードニキ一派）の根底をつくともどもに、マルクス主義に投げかけられる「経済決定論」「宿命論」の非難に

たいして、唯物史観における「理想」と行動、主体的契機の不可欠の重要性を、正当に強調しているのである。「マルクス主義者は理想になんの意義もみとめないというマルクス主義者観は、『現実』（のマルクス主義）にまっこうから対立するものである。理想についていうことになれば、マルクスの理論は、かつて人間の思想の歴史に存在したもつとも理想的な理論であるといわなければならない。そしてこれは、マルクスの理論の純粹に科学的な課題にたいしても、その実践的な課題にたいしても、同様にあてはまることである」<sup>(2)</sup>。たしかに、ブレハーノフの哲学的著作は、「すべての国際的マルクス主義文献のうちで最良のもの」(レーニン)<sup>(3)</sup>としての実質をそなえている。

にもかかわらず、ブレハーノフをきわめて高く評価したレーニンこそ、同時にブレハーノフの弱点をもつとも鋭くえぐりだした人であった。すなわち『哲学ノート』(一九一五年)のなかでレーニンは、ブレハーノフにおける「弁証法の核心」の理解の欠如を指摘して、つぎのように記している。

「研究すること——ブレハーノフは哲学(弁証法)についておそらく千ページぐらい書いた。これらのうちで『大論理

学』のことは、『大論理学』にちなんでは、その思想(すなわち、哲学的科学としての本来の弁証法)にちなんでは、一言も述べていない」<sup>(4)</sup>。

「一つのものの分裂と、この一つのものの矛盾した二つの部分の認識は、弁証法の核心である。ヘーゲルもまさにこのように問題を提起している。∴弁証法のこの側面には、通常(たとえばブレハーノフのばあい)十分な注意がはらわれていない。対立物の同一は、实例の総和と解されて(∴エンゲルスにあっても同じである。しかしこれは『通俗化のため』である)、認識の法則、(および客観的世界の法則)とは解されていない」<sup>(5)</sup>。

「弁証法こそ、(ヘーゲルおよび)マルクス主義の認識論である。事柄のまさにこの、側面」(これは事柄の一、側面ではなく、事柄の核心である)に、ほかのマルクス主義者はいうまでもなく、ブレハーノフは注意をはらわなかった」<sup>(6)</sup>。

レーニンのこれらの文言の意義を十分に解明することは容易でないが、少なくともここでレーニンが、ブレハーノフの弁証法理解を、(1)弁証法の核心を「対立物の統一」ととらえていないこと、(2)認識論としての弁証法の欠如、の二点におい

て批判し、しかもこの二つの点が相互に連関した不可分の関係にあることを示唆していることは、明らかであろう。

たしかにブレハーンフは、ヘーゲルに由来する「弁証法」の説明にさいして、量的変化の質的变化への転化、ならびに漸次性の中断＝飛躍をふくむ発展の理論としての意義を強調している。だがレーニンによれば、弁証法がこのような発展の理論でありうるのは、それが事物と運動を「対立物の統一」として把握するからにほかならない。「対立物の統一」は、自然（精神も社会もふくめて）のすべての現象と過程とのうちに、矛盾した、たがいに排除しあう、対立した諸傾向を承認すること（発見すること）である。この「運動観」だけが、「すべての存在するものの、自己運動」を理解する鍵をあたえる。それだけが、「飛躍」、「漸次性の中断」、「対立物への転化」、古いものの消滅と新しいものの出現、を理解する鍵をあたえる」。

ところでこの、対立物の統一と統一物の対立という弁証法の「核心」的視点は、いうまでもなく、認識過程にも適用されなければならない。というよりも元来弁証法は、ヘーゲルにおいて、存在と思惟との、客観的現実と主体的行為との、

相互媒介の論理として成立したものであった。マルクスの弁証法についても、この点は強調されなければならないまい。弁証法はなによりも、主体と客体との相互媒介の論理、したがって実践と認識の論理なのである。「弁証法こそ（ヘーゲルおよび）マルクス主義の認識論である。これは事柄の核心である」というレーニンの命題は、まさにこの意味に解すべきであろう。そしてこの点に「注意をほらわれない」ときには、「反映論に、認識の過程と発展とに、弁証法を適用する能力のない」ところの、実質上の「形而上学的、唯物論」に墮することとならざるをえない。

ここでわれわれは、唯物弁証法論史における一争点、すなわち、自然弁証法、歴史の弁証法ならびに思惟の弁証法の相互関連の問題に直面している。ここではこの問題に深入りする余裕はない。が、次の点だけは指摘しておかねばなるまい。自然と歴史の實在的運動法則性と、思惟がこれの「反映」であることとの承認が、唯物論の基本的見地である。だがこれは、基本的見地であり問題の出発点であるにすぎず、要はこの「反映」をまさに弁証法的にとらえるところこそである。戸坂潤の透徹した考察に依拠していえば、「認識する者は鏡

ではなくて、社会的に生きている実践的な人間である以上、「知識・模写は、何等かの仕方<sup>①</sup>に於ける人間の社会的実践活動（これは知覚や実験から、生産活動・政治活動まで包含する）が介入して構成の労をとることなしには、事実上なりたない<sup>②</sup>」。そしてつねに「人間の実践」を基礎とし基準とするところの实在反映<sup>③</sup>知識構成の過程は、「科学の方法」と「イデオロギー」を媒介としつつその総結果として「科学的世界像」に、すなわち「世界の統一的な模写・反映」に到達する<sup>④</sup>。したがって、自然と歴史の实在的弁証法とその「反映」としての思惟の弁証法とは、実践的認識過程の弁証法を介してはじめて区別における同一性にあるのであり、またこのような連関においてのみ、それらは現実的意義を有するといつてよいであろう。まさしく認識論としての弁証法こそ、「弁証法の核心」といわねばならない。

ブレハーノフの「客観主義」は、一面では、理論以前のいわば思想体質ともいべきものにその根源を求めることが出来るかも知れない。だが、実践活動家であるとともにすぐれて理論家であったブレハーノフをおもうとき、「客観主義」の根源は、まずもって（あるいは究極的には）その理論のう

ちに追究されねばならないであろう。そしてそれは、以上のレーニンにもとづく考察が正しいとすれば、「弁証法の核心」の無理解のうちに、したがってまた「認識論としての弁証法」の欠如のうちに、もとめられるべきではなからうか。

田中氏は、すでに引用したブレハーノフの「客観主義」の規定——「かれは唯物論的見地に立ちながら、経済過程の政治過程に対する規定性を過大に評価する傾向をもつ点で、したがって革命主体の自由な歴史創造の可能性の幅を狭く考える傾向をもつ点で、客観主義的なのである」——につづけて、いつておられる。「およそマルクス理論を採るひとならばすべて、下部構造の上部構造に対する基礎的制約性と、上部構造の下部構造に対する相対的作用力を認める。ブレハーノフもまた、歴史に対する意識の能動的意義について興味ぶかい考察を加え、一定の範囲内でそれを認めている。しかし、具体的な問題についての判断となると、下部構造の基礎的制約性・上部構造の相対的作用をどのように評価するかのちがいがあらわれてくる。ブレハーノフのばあいには、下部構造による制約性がつよくおしだされて、過程の必然性が強調せられ、一定のワケ内での諸可能性という発想が殺される。わたくし

は、プレハーノフとレーニンとの後年の対立は、このことに深くかかわっていると思う<sup>(1)</sup>。これはまことに興味ぶかく示唆にとむ論述である。だが、プレハーノフとレーニンとのあいだには、「経済過程の政治過程に対する規定性を過大に評価する傾向」をもつかもたないか、「革命主体の自由な歴史創造の可能性の幅を狭く考える傾向」をもつかもたないか、といった量的規定の差異の底に、認識論・組織論・実践論をつらぬく弁証法理解の差異があり、そしてこれこそ、両者の「対立」の根元をなすものと、とらえるべきではないだろうか。さらに、マルクス主義・マルクス経済学の根本問題について、粗略ながら若干考究する機縁を与えてくださった田中真晴、佐藤金三郎の両氏にたいして厚くお礼を申しあげるとともに、いささか切れぬ密刀をふりまわしたきらいがないでもない小論にたいして、きたんのないご批判やご教示をいただければ幸いである。

- (1) Samuel H. Baron, Plekhanov, the Father of Russian Marxism, 1963. p. ix.  
 (2) 川内唯彦訳、改訳『史的元論』、岩波文庫、上巻 二七二ページ。  
 (3) 「ふたたび労働組合について、現在の情勢について、

トロッキーとプハーリンの誤りについて」（一九二二年一月）、大月書店『レーニン全集』三二巻、九二二ページ。  
 (4) 『レーニン全集』三八巻、二四六ページ。

(5) 同右、三二六ページ。強調はレーニン。

(6) 同右、三二九ページ。強調はレーニン。

(7) 同右、三二六―七ページ。

(8) 同右、三二九ページ。

なお、レヴァイのつぎのプレハーノフ批判は、示唆に富んでいる。——「プレハーノフは弁証法のもっとも大きな特徴として、二つの規定をあげている。(1)矛盾における発展、(2)量と質との弁証法的関係。弁証法のこれらの個々の契機については、かれは非常によく理解している。だがかれは、ヘーゲルの自己意識論——これこそ弁証法の個々の契機を有機的全体に結合するものだ——は無視してもよいと考えており、マルクスとヘーゲルとの違いは、マルクスがヘーゲルの『世界精神』を『生産関係』の概念でおきかえたことに尽きると考えている。かれは、交互作用にかんするヘーゲルの考えの意義をよく理解している。これによれば『同一物の両側面は直接的所与として放置されることなく、第三の、高次のものの契機として』把握されなければならない。ところがかれはこの『高次のもの』を、一つの新しい、因果系列の先行肢節とみなしたのであって、このような見方の結果か



れは、世界精神と歴史とのヘーゲル的な関係を、因果関係にすりかえてしまうことにならざるをえなかった。ヘーゲルにたいするこのような誤解と無理解のために、マルクス主義は哲学的には、種々様々な諸要素の内的関連を欠いた羅列になってしまった。」(Revat, a. a. O., S. 229.)

(9) 戸坂潤「科学論」、勁草書房『戸坂潤全集』第一巻、一四六―七ページ。

(10) 同右、一五三ページ参照。

(11) 京大『経済論叢』八九巻五号、一〇―一ページ。

## 共同研究室

昭和四十一年度第一回研究会(五月十三日)

▼テーマ「労働力不足と中小企業の実態」

―近畿地方のケース・スタディを中心として―

報告者 浜崎 正規氏

(報告要旨は資料欄に掲載)